

H I      E

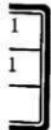
# 比 惠 44

—比恵遺跡群第97次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第900集

2006

福岡市教育委員会



H  
E  
**比 惠 44**

—比恵遺跡群第97次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第900集



遺跡番号 HIE-97

調査番号 0480

2006

福岡市教育委員会



## 序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は弥生時代において「奴国」の拠点の一つとして全国の中でも特に繁栄を極めた比恵遺跡群に含まれています。比恵遺跡群は古代においても日本書紀に記載された「那津官家」の施設とみられる大型倉庫群が発見され関心を集めています。さらに今回、この倉庫群に近接した位置で同様の大型建物が検出され、その関連と広がりが注目されるところです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた山田義信様、大東建託株式会社はじめ関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

## 例　　言

1. 本書は福岡市博多区博多駅南5丁目133、134において福岡市教育委員会が2004年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧宏行が担当し、造構図面作成は荒牧、藤野雅基、兼田ミヤ子、小野千佳、高手興志子が行い、造構写真撮影は荒牧が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、濱田美紀、相原聰子、荒牧、浄書は濱石正子、大石菜美子、荒牧、遺物写真撮影は荒牧が行った。
4. 本文は荒牧が執筆、編集した。
5. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

## 凡　　例

1. 本書掲載の造構図方位は国土座標北による。
  2. 掲載した遺物は通し番号を付した。
- 表紙の題字は安野 良さんによる。

## 本文目次

Iはじめに .....	1
(1) 調査に至る経過 .....	1
(2) 調査の経過 .....	1
(3) 調査体制 .....	1
II位置と環境 .....	2
(1) 地形 .....	2
(2) 歴史的環境 .....	2
III調査の記録 .....	5
(1) 概要 .....	5
(2) 土層 .....	5
(3) 遺構と遺物 .....	5
井戸 (SE) .....	5
SE06 .....	5
SE11 .....	5
SE20 .....	5
SE23 .....	10
SE29 .....	10
SE42 .....	13
SE03 .....	16
SE128 .....	16
土壤 (SK) .....	18
SK01 .....	18
SK02 .....	18
SK160 .....	22
掘立柱建物跡 (SB) .....	24
SB01 .....	24
SB02 .....	24
SB03 .....	26
IVおわりに .....	30

## 挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺遺跡群 (1/10万)	.....	(1/4,000 昭和初期) .....	4
.....	.....	目次 Fig. 5 比恵97次遺構配置図 (1/100) .....	7
Fig. 2 調査区位置図 (1/1,000) .....	3	Fig. 6 SE06、11、20実測図 (1/40) .....	9
Fig. 3 比恵遺跡群旧地形図		Fig. 7 SE06、11、20出土遺物実測図 (1/4)	
(1/10,000 明治33年測) .....	4	.....	9
Fig. 4 調査区周辺旧地形図		Fig. 8 SE23実測図 (1/40) .....	10

Fig. 9 SE29実測図 (1/40) .....	11	Ph. 2 調査区北側 (南東から) .....	6
Fig. 10 SE29出土遺物実測図 (1/4) .....	12	Ph. 3 SE06完掘 .....	
Fig. 11 SE42実測図 (1/40) .....	13	(バックホーによる掘削南から) .....	8
Fig. 12 SE42出土遺物実測図 (1/4) .....	14	Ph. 4 SE11完掘 (南から) .....	8
Fig. 13 SE03実測図 (1/40) .....	16	Ph. 5 SE23完掘 (西から) .....	10
Fig. 14 SE128実測図 (1/40) .....	16	Ph. 6 SE29遺物出土状況 (北から) .....	11
Fig. 15 SE03出土遺物実測図 (1/4) .....	17	Ph. 7 SE29出土遺物 .....	12
Fig. 16 SK01実測図 (1/20) .....	19	Ph. 8 SE42遺物出土状況 (西から) .....	13
Fig. 17 SK01出土遺物実測図 (1/4) .....	20	Ph. 9 SE42出土遺物 .....	15
Fig. 18 SK02実測図 (1/20) .....	21	Ph. 10 SE03遺物出土状況 (北東から) .....	16
Fig. 19 SK02出土遺物実測図 (1/4) .....	21	Ph. 11 SK01遺物出土状況 (北から) .....	18
Fig. 20 SK160実測図 (1/40) .....	22	Ph. 12 SK02遺物出土状況 (東から) .....	21
Fig. 21 SK160出土遺物実測図 (1/4) .....	23	Ph. 13 SK160完掘 (南から) .....	22
Fig. 22 SB01実測図 (1/60) .....	24	Ph. 14 SK160遺物出土状況 (北から) .....	23
Fig. 23 SB02実測図 (1/60) .....	25	Ph. 15 SK160出土遺物 .....	23
Fig. 24 SB02柱穴出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3) .....	27	Ph. 16 SB01完掘 (北西から) .....	24
Fig. 25 SB03実測図 (1/60) .....	27	Ph. 17 SB02完掘 (北から) .....	26
Ph. 1 調査区全景 (北側一部を除く北西から) .....	6	Ph. 18 SB03完掘 (南東から) .....	28
		Ph. 19 SP155 (SB03) 検出 .....	28
		Ph. 20 SP156 (SB03) 検出 .....	29
		Ph. 21 SP162 (SB03) 検出 .....	29

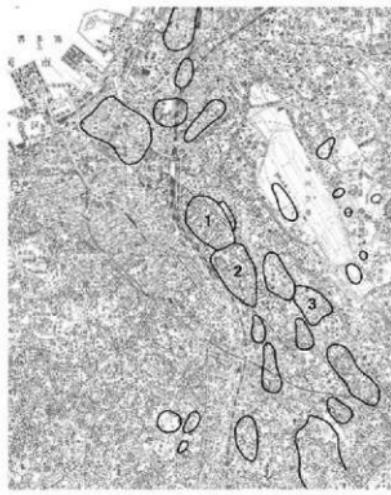


Fig. 1 比恵遺跡群と周辺遺跡群 (1/10万)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成16年4月6日、大東建託株式会社より福岡市博多区博多駅南5丁目133、134における共同住宅建設計画に伴って「埋蔵文化財の有無について（照会）」の書類が埋蔵文化財課に提出された。これを受けた当課では書類審査を行い、同年12月24日試掘調査を実施した。その結果、調査が必要と判断し、施主の山田義信氏と建設を請け負った大東建託株式会社と調査期間や費用について協議を重ねた。その結果、発掘調査を平成17年2月1日より開始し、約2ヶ月半を要して同年3月8日に終了した。

## 2. 調査の経過

造構面までは極めて浅く、調査区は構築物が無い北側と西側を除く建物の範囲全面に設定された。実質行った調査範囲は、敷地全体の面積454㎡に対し半分に近い242㎡に及ぶ。

まず、重機により約10cm厚みの表土剥ぎを行ったが、廃土置き場の都合から北側の一部は残し、南側の調査終了とともに反転してこの範囲の表土剥ぎを行った。検出面は表土直下の鳥栖ロームで、包含層は無く削平を受けているものと思われる。次に入力によって造構検出を行った。建物基礎、暗渠等の搅乱が多く、また、防空壕とみられる地下式土壙も発見された。造構の分布は削平を受けているにも拘わらず比較的密であった。このため終了予定日の間際まで調査期間は及んだ。

## 3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

(調査主体) 福岡市教育委員会 (調査総括) 埋蔵文化財課長 山口譲治 調査第2係長 池崎譲二  
(庶務) 文化財整備課 御手洗 清 (試掘調査・協議) 事前審査係長 濱石哲也 担当 久住猛雄 (調査担当) 荒牧宏行 (調査作業員) 黒瀬千鶴 武田潤子 藤野雅基 安高精一 野口リウ子 小野千佳 高手興志子 兼田ミヤ子 酒井次憲 豊丸秀仁 永田八重子 渋谷留雄 濱石ミ子 安高邦晴 櫻田信一 知花繁代 板本久幸 沖政芳 松若俊美 (資料整理) 濱石正子 松下伊都子 小金丸昌世 大石菜美子 相原聰子

## II 位置と環境

### 1. 地形

調査地点は比恵遺跡群の北西端に位置する。地形図から遺跡が立地する鳥栖ローム（中位段丘面）は北西方向へ延びていき、本調査地点より約60m北側では埋没もしくは開析を受けた湿地帯が広がっているものと思われる。西側は約70m離れた52次調査地点付近が西限とみられる。

本調査区内で造構検出面となる鳥栖ローム面の標高は南側で5.9m、北側で5.5mを測り、約30mの延長で40cmの比高差をもって傾斜している。上述の52次調査地点ではローム面は5.30mまで下がっている。

本調査とも関連する「那津官家」関連施設として国史跡となった第8次、72次調査地点は東約50mに位置し、上部は同様に削平を受けているものの標高5.7～5.9mがローム面となっていることから、ほぼ平坦な地形が本調査地点まで広がっていたことが推察される。この第8次、72次調査地点の東側は埋没谷によって東側の中位段丘面と分断されていることが判っている。同地点は明治33年や昭和初期の地形図に那珂川から分岐した水路が通っていたことがみられることから旧河道もしくは人工的な改変を加えた運河がほぼ同方向に走行していた可能性がある。その対岸には同様に古代の大型建物や倉庫群が検出された第7次、13次や第39次調査地点が立地している。

### 2. 歴史的環境

ここでは今回の調査でも検出された古代の大型建物に関する調査事例に関して概略を記す。

1項でも述べた第8次、72次調査地点では布掘状の柱列で区画された約半町（55m）の区画のなかに、3×3間の大型縦柱建物が中央に空間を置き整然と配列されていた。現在、「那津官家」関連施設として国史跡になっている。同様の大型倉庫群は39次調査でも検出されている。特異なのは第7次、13次で検出されたコの字に配置された長舎と布掘の柱列である。長舎の可能性もある布掘柱列で区画されたなかに2×9間の長舎が配置された部分は約28mを測り、先の第8次、72次調査で区画された距離の半数となっていることからも基準値をもって設計されたことが推察される。

これら各調査地点で検出された建物は丘陵のほぼ先端に並列状に配置されている共通性があるが、その主軸方位は異なり、各地形に制約されているものと思われる。このことは同様の造構が検出されている福岡市内の有田遺跡群においても言える。

これらの造構の時期は既往の調査では6世紀後半～7世紀前半に比定されている。以後律令体制のもとでは再編成され一連の中位段丘面の南側に位置した那珂遺跡群に変遷したものと考えられている。

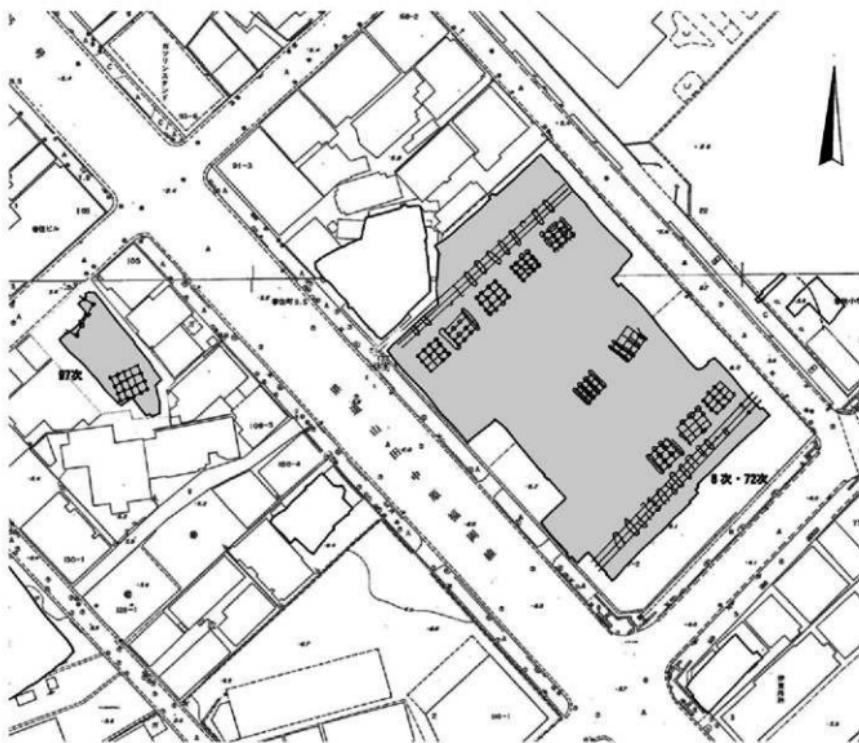


Fig. 2 調査区位置図 (1/1,000)

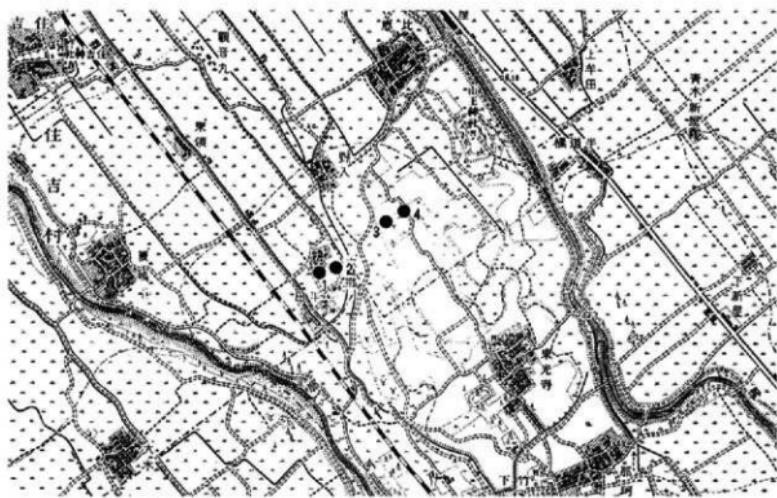


Fig. 3 比恵遺跡群旧地形図 (1/10,000 明治33年測)

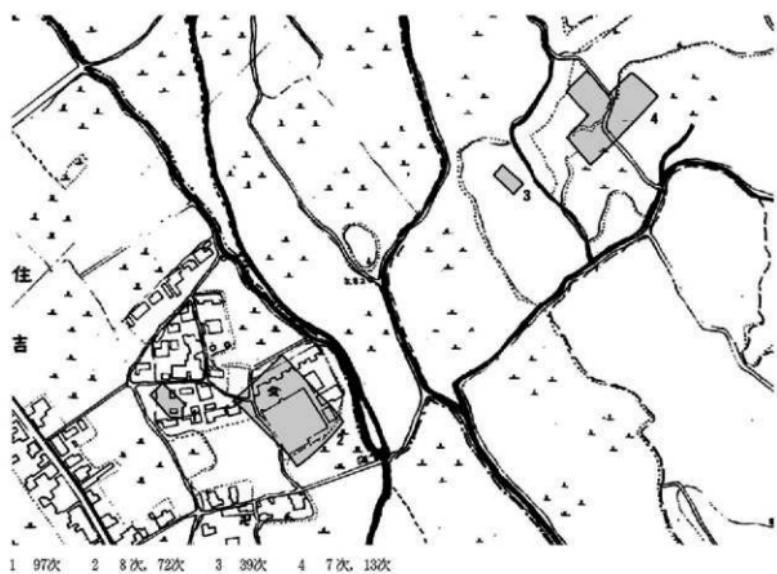


Fig. 4 調査区周辺旧地形図 (1/4,000 昭和初期)

### III 調査の記録

#### 1. 概要

検出された遺構は弥生中期末から終末におよぶ井戸が7基、古墳初頭（布留期）の方形土壙1基、弥生中期後半以降の1×2間の掘立柱建物跡1棟、古墳後期～古代の3×4間の大型縦柱建物跡1棟、3×3間の大型建物跡1棟が検出された。その他、柱穴は多く検出されたが、豊穴住居跡は削平され消滅した為か検出されなかった。

「那津官家」との関連で国史跡となった第8次、第72次調査地点が近接し、本調査においても検出された古代の大型建物跡は注目される。

#### 2. 土層

厚さ10～30cmの現代整地土下に鳥栖ロームが堆積し、包含層はない。鳥栖ローム面は標高5.5～5.9mを測り、北側へ緩やかに傾斜し下がっている。この北側では整地層はほとんど無く、ローム面が露出した部分もある。

#### 3. 遺構と遺物

##### 井戸 (SE)

総数8基検出された。小型のSE128が北西際で単独に検出されたほかは南側に集中している。

##### SE06

調査区南端で検出された。上端径80cm、下底径50cm、検出面からの深さは230cmを測り、検出された井戸のなかで最も深い。下底検出は重機を用いて上部を切り崩して行ったが、下底面は鳥栖ロームの下部にとどまっていた。

##### 出土遺物

1は滑石製石包丁である。刀部の形状をとどめているのは中央部のみで両端付近は片面からの剥離または平坦面に近い。2の甕は外面タテハケが摩耗しつとんど見えない。内面口縁部から頸部にかけてハケメが残るが体部下位はナデ消されている。時期は弥生中期末とみられる。

##### SE11

調査区南端でSE06に近接して検出された。古代の縦柱建物SB02の柱穴に切られる。上端径100～110cm、下端径80～90cm、検出面からの深さは170cmを測る。基底面は鳥栖ローム下部におさまり、凸凹がみられる。

##### 出土遺物

祭祀に伴う完形品は無く、小片のみ出土した。3の甕口縁部は湾曲した頸部から端部が外方へ張り出し、外面左上がりのハケメ後にヨコナデ、内面は横位のハケを施す。破片が小さく口径は不明。同一個体と思われる胴部片は外面上位に左上がりのハケメが部分的に残り、その上から横位のミガキ、更に縦位のミガキが施されている。下位は器厚が薄くなり、2mm程度まで減じる。外面は横位から斜位のミガキが施され、内面は遺存する全面にハケメが明瞭に残る。色調は外面が灰色から黒色、内面は黒化している。

##### SE20

調査区南東際で検出した。上部は暗渠と防空壕で破壊され、上端が90～120cmの梢円形プランを呈す。下端は径65cm、検出面からの深さは140cmを測る。下底面は鳥栖ローム内にとどまる。



Ph. 1 調査区全景（北側一部を除く 北西から）



Ph. 2 調査区北側（南東から）

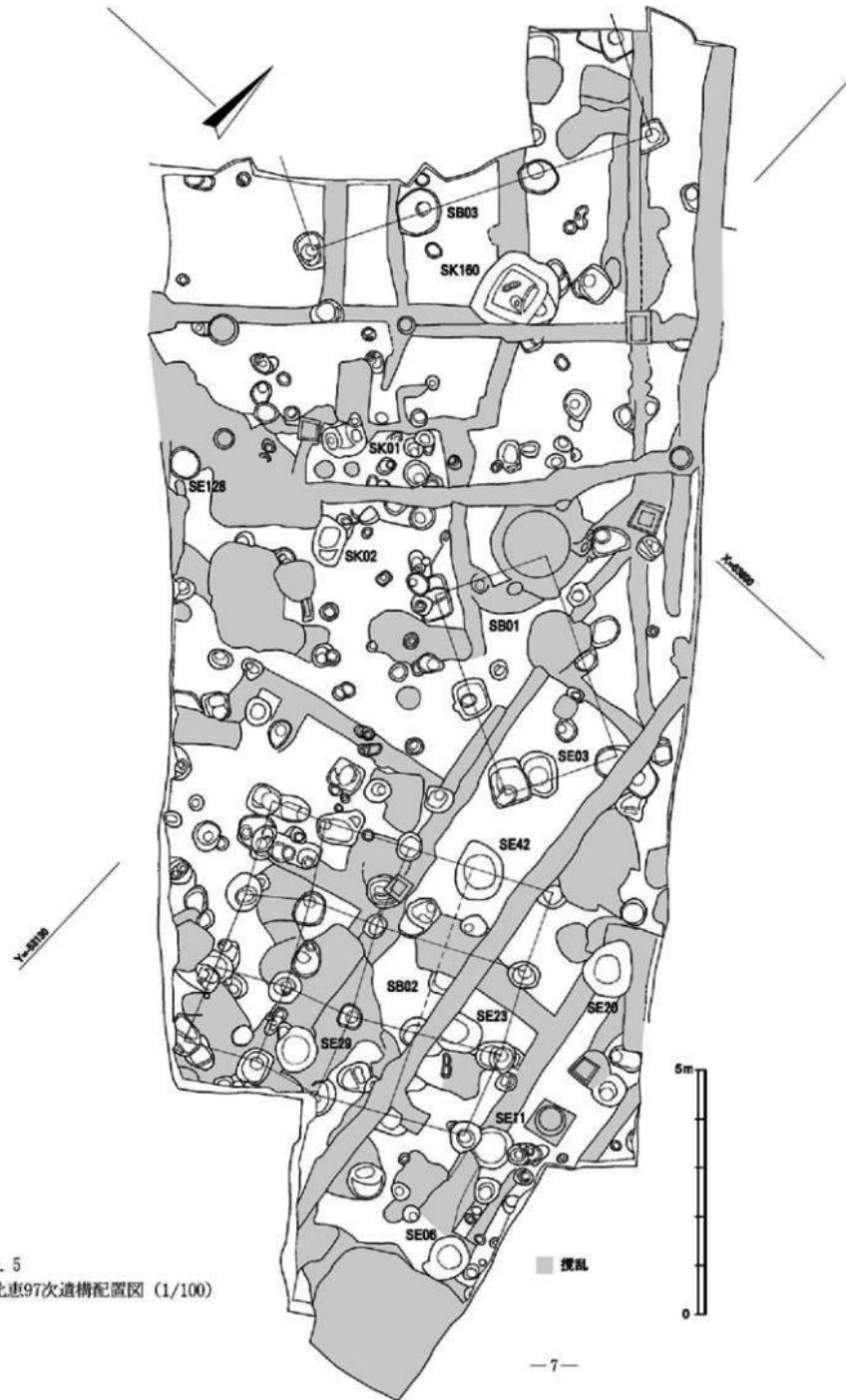


Fig. 5  
比良97次造構配図 (1/100)



Ph. 3 SE06完掘（バックホーによる掘削 南から）



Ph. 4 SE11完掘（南から）

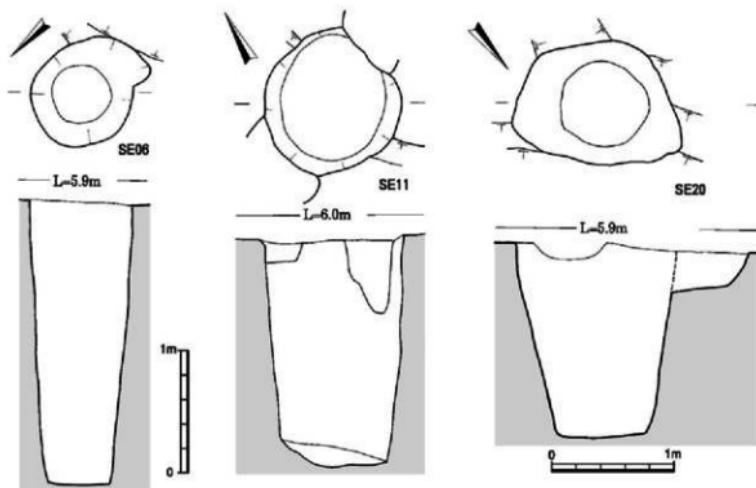


Fig. 6 SE06、11、20実測図 (1/40)

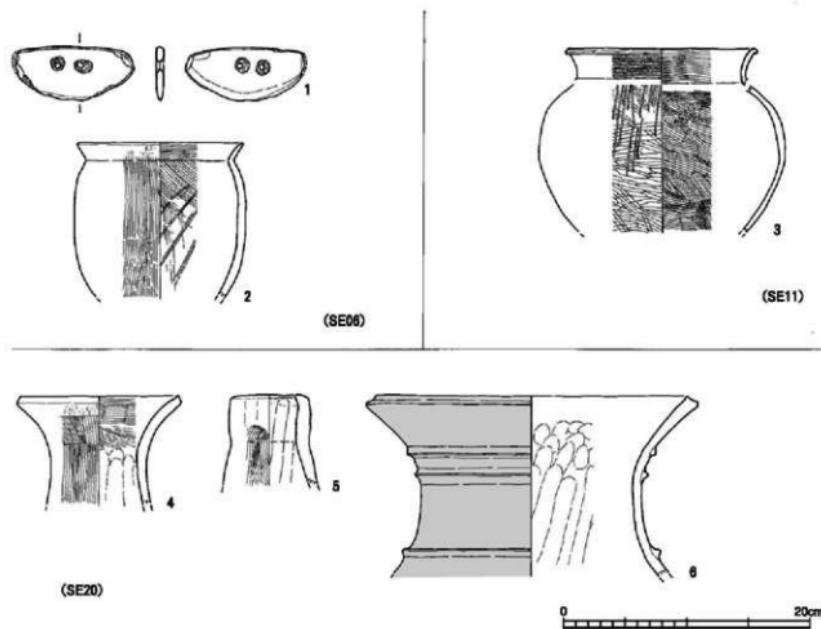


Fig. 7 SE06、11、20出土遺物実測図 (1/4)

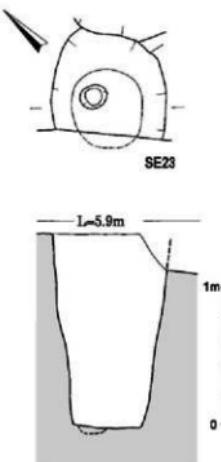


Fig. 8 SE23実測図 (1/40)



Ph. 5 SE23完掘（西から）

#### 出土遺物

破片のみコンテナ半分程が出土した。4の器台は口縁端部がやや丸みのある面をなす。外面に細かい縱方向のハケメを施し、口縁部はさらにヨコナデを加える。内面は口縁部周辺を横位のハケメ、頸部以下は指頭痕を残しながら上げている。5は小形の巻か。口縁部はわずかに内湾して立ち上がり、端部は内側に少し張り出す。頸部の屈曲以下の体部が緩やかに張っていく。全体に粗雑な感じで、外面はタテハケ後ナデ、内面は指頭痕が顕著に残る。胎土は砂粒を多く含み粗い。外面黒灰色を呈しているが剥落した部分が多い。内面赤褐色を呈す。6の壺は遺存する外面と内面口縁端部付近に赤色顔料が塗布されている。頸部の上位に2条、下位の胴部との境に1条、断面三角形の突帯を貼り付けている。胎土はきめ細かく精良。弥生中期末か。

#### SE23

調査区南側で検出された。上部は暗渠で破壊されているが、上端径85~100cm、下端径50~60cm、深さ140cmを測り、下底は鳥栖ロームにとどまる。底面に径20cmの浅いビットが検出された。

出土遺物 遺物は少なく、弥生土器の小片と黒曜石がビニール1袋程度である。

#### SE29

調査区南西際で検出された。上端は径95cmの正円に近い。下端は径70cm、深さは120cmを測る。下底は鳥栖ロームの下部にとどまる。また、下底からは7の壺口縁部の一部と10、11の壺が完形で出土した。10と11は横位の状態で口縁の位置が互い違いとなっていた。

#### 出土遺物

7の袋状口縁部は外面の窄まった頸部以下に縦位のハケメを残す。内面は頸部以下に横位のハケメが部分的に残るがほとんどナデ消されている。8は7と同一個体とみられる体部下半部である。外面に縦位の細かいハケメが施されているが下部はナデ消されている。底部は平底ないしわずかな丸みを

おびる。外面の底部際には屈曲がみられ、内面は中心を強くナデ押さえている。9は体部上位に細かい縦位のハケメを残すが、下位はナデ消されている。内面はわずかに横位のハケメが残る部分があるがナデによって消されている。外面の口縁端部は連続した指押さえの痕がみられる。器面は剥落しているが、赤変した部分や煤が付着していたと思われる部分がみられる。胎土は細かい砂粒を多く含みやや粗い。10は下底から出土した完形の甕である。体部に細かいハケメが施されているが、上位は横方向に後で加えている。下位は斜位に施されているが、ほとんどナデ消されている。内面はナデを施し、薄い黒灰色を呈す。底部は平底である。11も下底から出土した完形の甕である。内面にハケメをよく残しているのに対し、外面はナデ消されている。外面の体部下位の2箇所に器面が剥落した部分がみられる。焼成時によるものか不明。

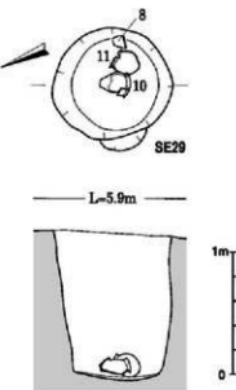


Fig. 9 SE29実測図 (1/40)



Ph. 6 SE29遺物出土状況（北から）

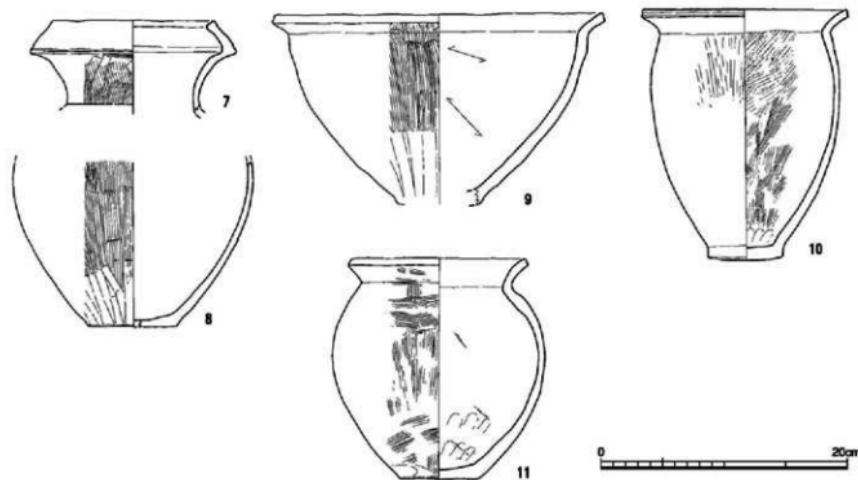
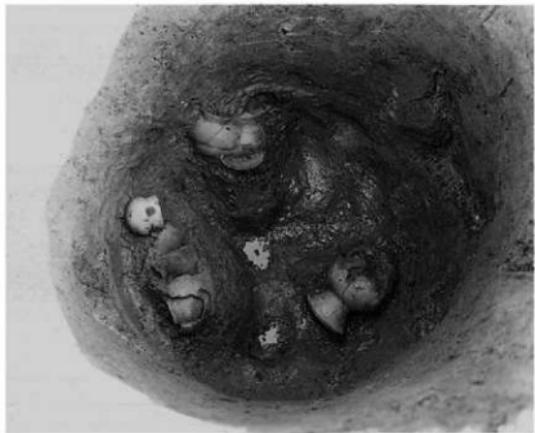


Fig. 10 SE29出土遺物実測図 (1/4)



Ph. 7 SE29出土遺物



Ph. 8 SE42遺物出土状況（西から）

#### SE42

調査区南寄りの中央部で検出された。掘方上端は径100~110cmの円形プランを呈し、下端径80cmを測る。深さ130cmで鳥栖ローム下部にとどまる。

下底から6個体の遺物が出土した。15の袋状口縁壺が横になつて下底の壁際から出土した。12、13、14、16、19の遺物は下底から約20cm浮いた同レベルの壁際から出土した。

#### 出土遺物

12は下底から出土した完形の小型壺である。外面の口縁部から頸部にかけて1mm前後の細い継位のミガキが3~8mm間隔で暗紋状に施されている。体部中位から下部にかけては横位から斜位の細かいミガキを施す。内面は口縁部に浅い横位のハケメが残り、体部から底部にかけてはねじり回したような横位のハケメが施され中位はハケメが明瞭に残る。黄褐色を呈し、頸部に1箇所径約2.5cmの黒斑が残る。13も下底から出土した完形の壺である。器面が剥落し極めて不明瞭であるが12と同様に口縁部に継位のミガキが部分的にみられる。体部もミガキが施されていたと思われるが、最大径付近の体部中位にハケメが残っているのが判る程度である。内面は口縁部は不明であるが、体部は横位から斜位のハケメが残る。底部に1箇所、焼成後に外側から穿った径6mmの孔がある。他の対称的な位置に欠損がみられることから4箇所に穿孔が施された可能性がある。体部上位の1箇所に径2.4cmの略円形の黒斑が残る。14も下底から出土した口縁部を一部欠く程度の完形に近い小型壺である。底部はわずかに丸みを帯びるがほぼ平底である。時期的に他と異なると考えられ、再利用の可能性もある。外面は器面が剥落し、調整不明。内面も器面が剥落しているが、ハケメはほとんどナデ消されていたと思われる。胎土は砂粒を多く含み粗い。15も下底から出土したほぼ完形の袋状口縁壺である。赤色顔料が部分的に残る。口縁部が横位のナデ、頸部から体部は丁寧なナデ調整を施し、ハケメは消されている。16はわずかに丸みを帯び

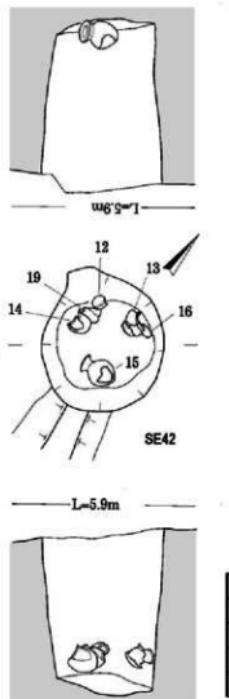


Fig. 11 SE42実測図 (1/40)

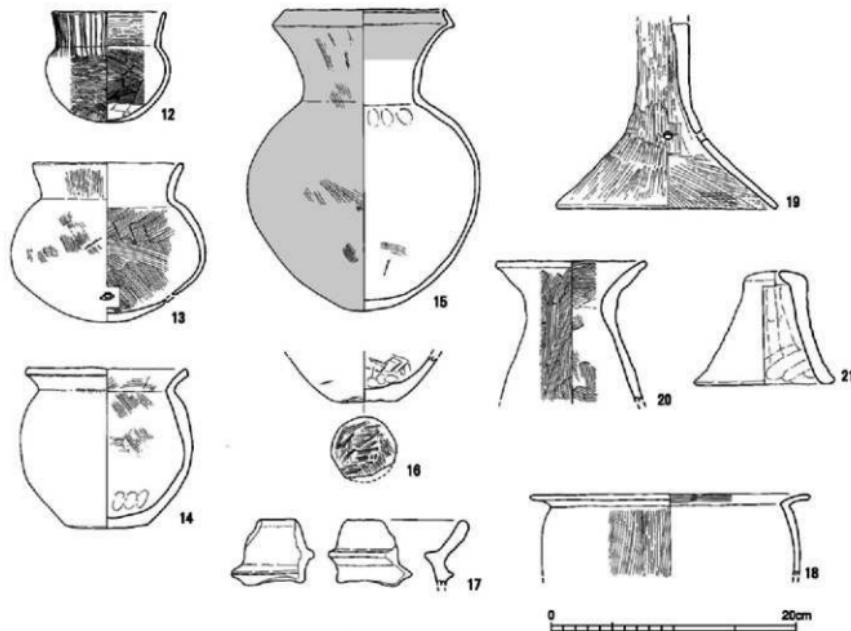


Fig. 12 SE42出土遺物実測図 (1/4)

た壺底部である。外底部に茎状のもので削った痕跡が残る。17は甌口縁部、18は弥生中期後半の甌。19の高環脚部は外面に縦位のミガキを施し、内面は据に間隔の広いハケメが明瞭に残る。遺存する部位の1箇所に穿孔がみられる。20の器台は内外面にハケメを明瞭に残す。21の支脚は外面にタタキの痕跡がわずかに残る。後期前半代の遺物も含むが下底の完形品は弥生終末とみられる。



Ph. 9 SE42出土遺物



Ph. 10 SE03遺物出土状況（北東から）

#### SE03

調査区のはば中央で検出された。検出時においてSB01の柱穴に切られた状態で弥生中期後半代の遺物破片が重なりあっていた。この集中した遺物を取り除いた下部に同規模のプランで深さ160cmの掘り込みを検出した。上端径100~120cm、下底で60cm径を測る。下底は鳥栖ローム内にとどまる。

#### 出土遺物

19~27は検出面のレベルで出土した遺物である。19の瓢形土器は全体の1/3程が遺存している。口縁部から外面の突帯まで赤色顔料が塗布されているが、部分的に下のハケメがみられる。体部内面はナデ調整を施し、黒灰色を呈す。口縁部上部には径15mmの円形浮文を貼り付けているが、遺存している部位が小さいため個数は不明。底部には径2cm程度の穿孔がみられる。20、21はくの字に折れた甕口縁部で20は赤色粒を多く含む。21は外面にタテハケが良好に残る。22は上げ底の底部、23は甕底部、24は器台である。25~27の大形甕は頸部に断面三角形の突帯を有し、口縁部は内湾していく字に立ち上がる。胎土は比較的きめ細かく、赤色粒を含む。

#### SE128

調査区の北西部で孤立して検出された。径60~70cmの小型の掘方で深さも約1mと浅い。出土遺物は少ないが弥生土器のみで、わずかにレンズ状になった底部も出土し、後期中葉くらいと思われる。

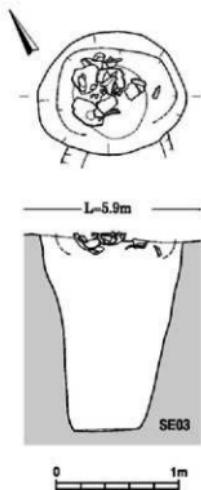


Fig. 13 SE03実測図 (1/40)

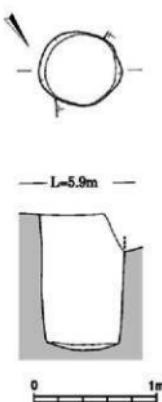


Fig. 14 SE128実測図 (1/40)

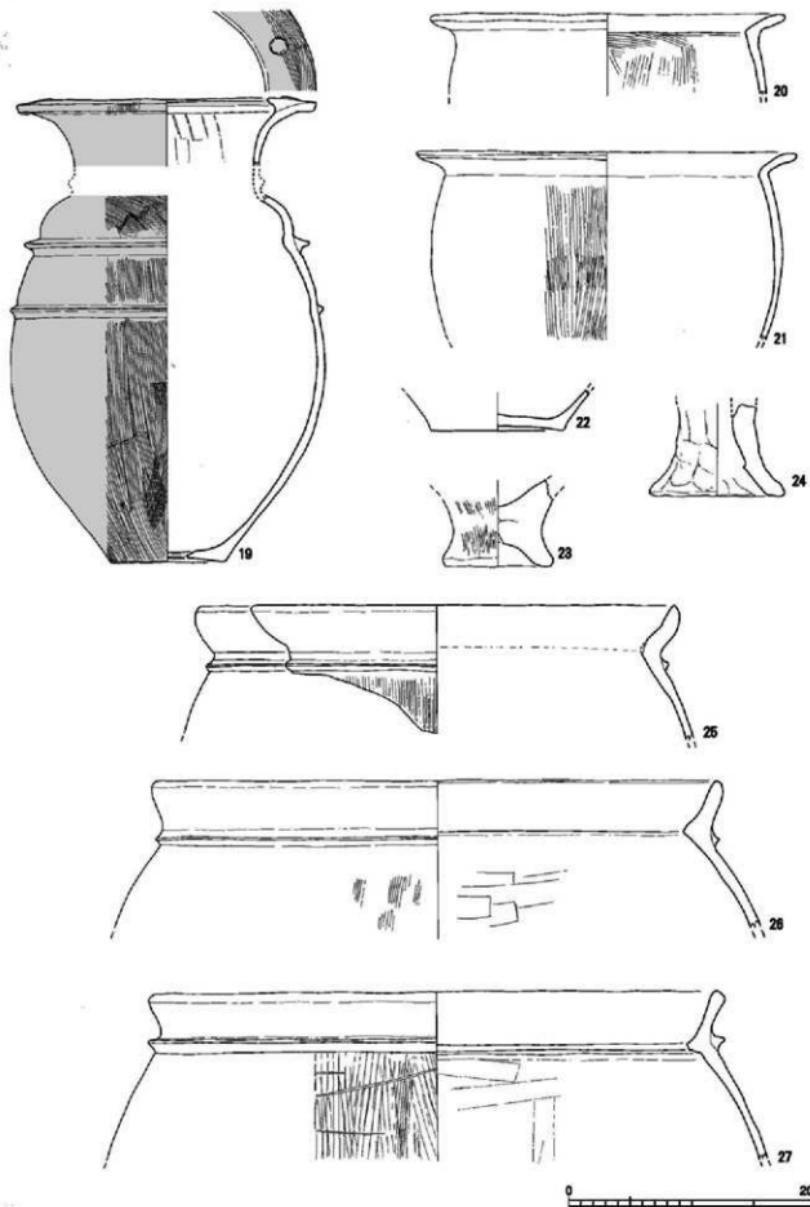


Fig. 15 SE03出土遺物実測図 (1/4)



Ph. 11 SK01遺物出土状況（北から）

#### 土壤（SK）

##### SK01

調査区北よりの中央で検出された。北側は暗渠で破壊されているが検出時において長径90cm、短径80cmの楕円形プランの土壌が検出された。土壌内には28の瓢形土器が倒置の状態で単独に際から出土し、東側は甕29～34の破片が破損した状態で出土した。また、接して径30cmの平坦に近い砂岩質の丸石も出土した。土器片はこの石の下部からは出土せず、横もしくは上部に接していた。これらの遺物片を取り除き、土壌下部を露呈すると、径40cm程度の柱穴状のビットが2個検出された。柱抜き取り後の祭祀に伴うものか。

##### 出土遺物

28の瓢形土器は下半部を欠損しているが、32が底部と考えられる。外面の器面は剥落し、ハケメがみえている。内面はナデ調整。29の甕は頸部が強くナデ回され凹む。30は全周の1/4にわたる口縁部を欠いた底部までの胴部片のが横位の状態で出土した。29と同一個体の可能性もある。31、33は甕底部。34は口径31.4cm、器高34.1cmの大型甕である。全体的に器壁は薄く3mm程度の部分もある。外面にタテハケを残し、内面は部分的に若干残す程度である。出土土器の時期は弥生中期末におさまる。

##### SK02

調査区中央で検出された。上面での検出は径70～95cmの楕円形プランであったが、下部は2つの柱穴状のビットが接した形状を呈していた。その一方の下底から40cm浮いた位置で甕片36が横位の状態

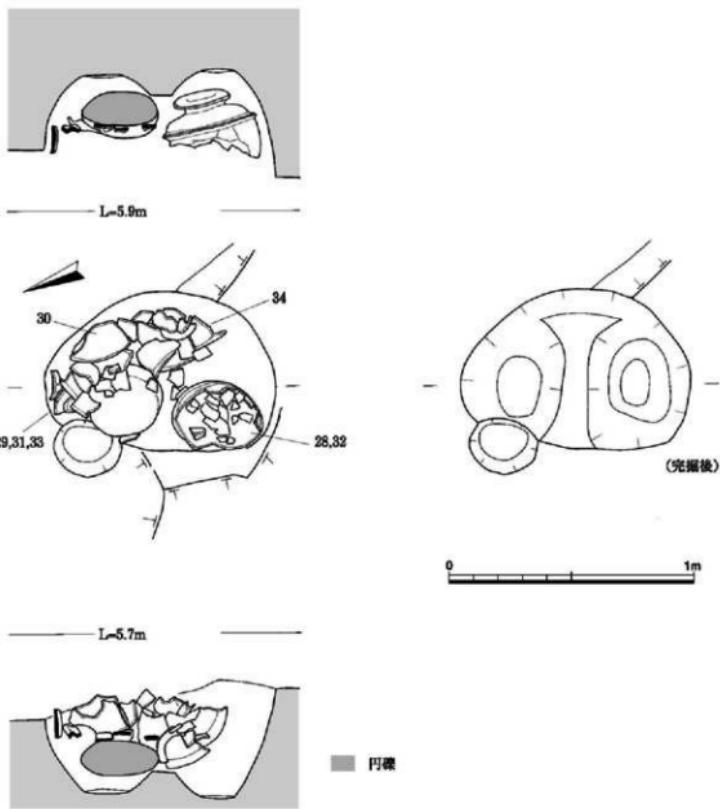


Fig. 16 SK01実測図 (1/20)

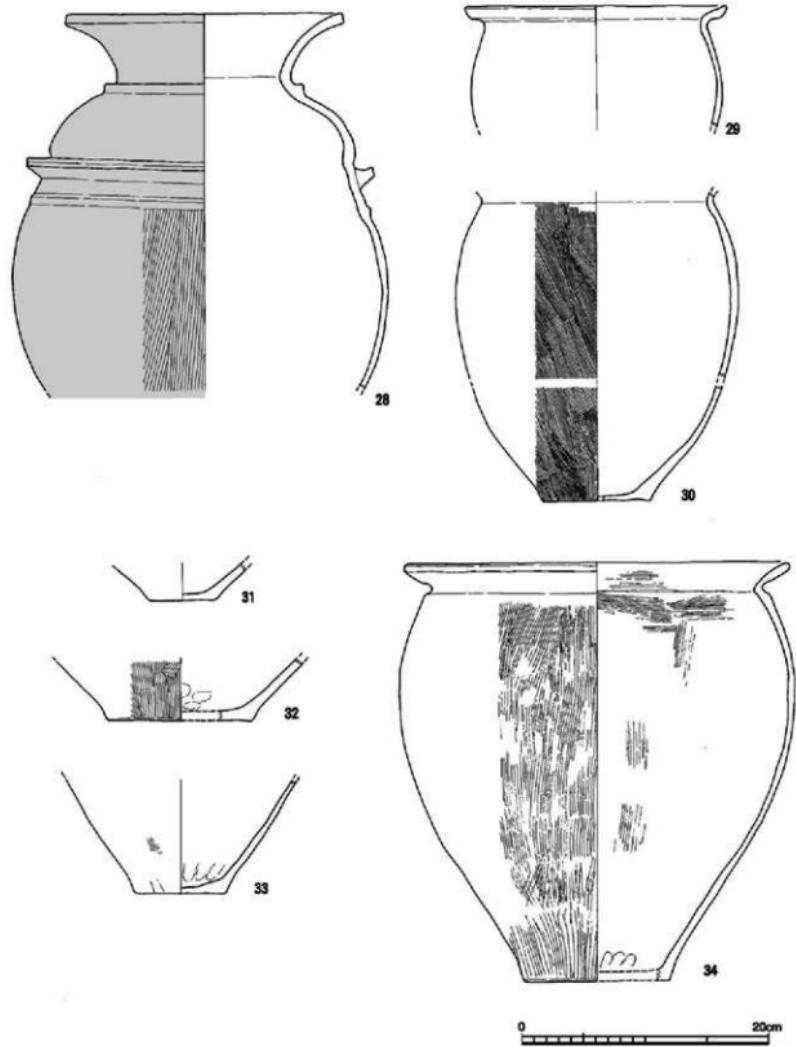


Fig. 17 SK01出土遺物実測図 (1/4)

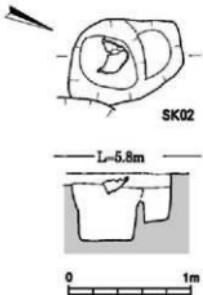


Fig. 18 SK02実測図 (1/20)

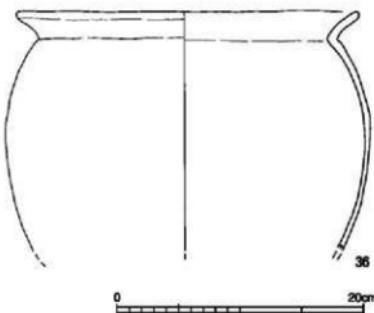


Fig. 19 SK02出土遺物実測図 (1/4)



Ph. 12 SK02遺物出土状況 (東から)

で出土した。SK01同様に柱抜き取り後の祭祀に伴うものか。SK01からは芯心で2.0m離れている。柱列が2×2間の掘立柱建物跡になる可能性があるが確定できない。

#### 出土遺物

36は全周の1/2弱が遺存する。内外面ともに器面が剥落し、あれて調整は不明である。器体は2次火熱を受け脆い。35は接した小柱穴から出土した鉢形の赤色顔料を塗布した土器である。器面は剥落し調整不明。胎土は砂粒が少なく精緻。

#### SK160

調査区北よりの中央で検出された。南東部が暗渠で破壊され、東辺は柱穴と切り合っているが、上端は1辺170cmの隅丸方形プランとみられる。下底は1辺90cmの方形に窄まる。深さは約1.0mを測り、下底から約50cmの中位で四方の壁に屈曲がみられ、下底からの立ち上がりが急となっている。下底の10cm下がった壁際から完形の甕41が横位の状態で出土した。近接して鉢形の精製土器の破片37も出土した。

#### 出土遺物

37は下底から出土した鉢形土器の破片である。全体の約1/4が遺存する。内外面の器面が剥落し、器表の調整は不明であるが、外面の上位にタテハケの一部や、下位にジグザク状の削りだすような強いハケメがみられる。胎土は砂粒を少し含むが精緻である。38～40は高环脚部である。38は器面が剥落し調整は不明であるが、成形時の浅い縦位の稜線がみられる。40も器面が剥落し調整は不明瞭であるが、裾の端部付近に一部ミガキの痕跡はあるが、連続した細かいミガキは認められず、周縁に沿った横位のハケ後、ヨコナデ調整と思われる。41の布留式甕は頸部から胴部上位はヨコナデによって仕上げられ横位の沈線が一条巡る。これより下位はヨコハケと斜位から縦位のハケメが下方にむかって連続して施されているのが残る。

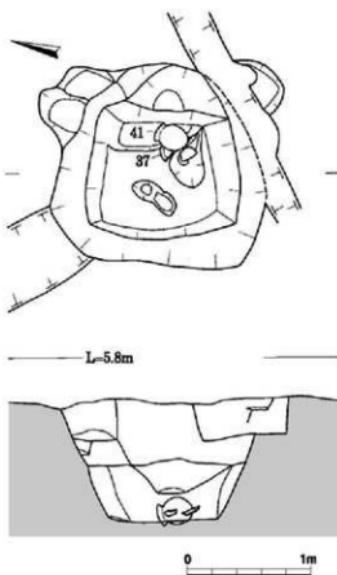


Fig. 20 SK160実測図 (1/40)



Ph. 13 SK160完掘 (南から)

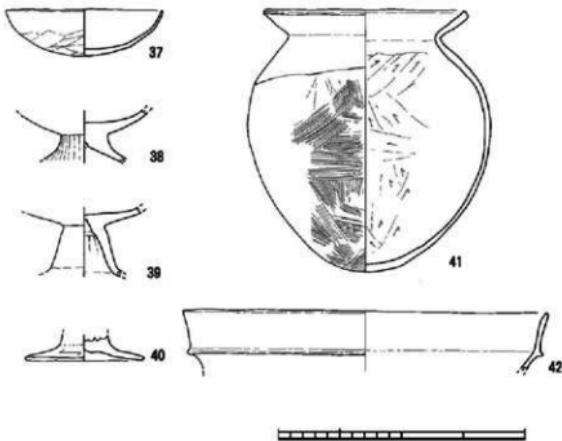


Fig. 21 SK160出土遺物実測図 (1/4)



Ph. 14 SK160遺物出土状況 (北から)



Ph. 15 SK160出土遺物

42は複合口縁壺である。

#### 掘立柱建物跡 (SB)

復元したものは弥生中期とみられる $1 \times 2$ 間のSB01、古代の $3 \times 4$ 間の縦柱建物跡SB02、古代の $3 \times \alpha$ 間のSB03の3棟である。いずれも主軸方位は異にしている。

#### SB01

主軸方位をN-60°-Wにとった $1 \times 2$ 間の東西棟である。南側桁行の柱列は残りが良く、幅70cm、長さ80~90cmの方形の掘方に径25cmの柱痕が検出できた。柱間は芯心で220cmを測る。深さは東側に向かって深くなり、西側が相当削されていることが判る。北側の柱列は暗渠により大半が破壊されているが、梁間は240cm前後と思われる。出土遺物は弥生土器小片のみで時期をおさえられないが、SK03との切り合いや、他の遺構との関連から弥生中期後半以降と考えられる。

#### SB02

調査区南側で検出された。 $3 \times 4$ 間の縦柱建物跡に復元され、梁行方位をN-23°-Wにとった東西棟である。東側梁行の柱列は整然と配置されているのに対し、西側は歪みがみられる。柱穴は辺長60~80cmの略方形プランを呈し、径27cm前後の柱痕が検出された。芯心の柱間は梁行方向で180~190cm、桁行方向は短く150~160cmを測る。

#### 出土遺物

柱穴からの出土遺物は小片のみで確定的な時期は決められないが、古墳後期以前には押さえられる。

43、46、48は同じSP57から出土した。43は須恵器甕片、44は土師器甕取手、45は弥生後期の甕底部、46は土師器碗形の土器である。内面口縁下につまみ上げた張り出しが巡る。内外面摩耗し、調整不

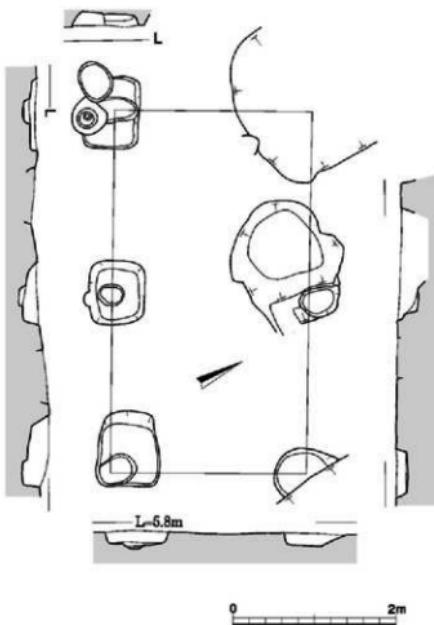


Fig. 22 SB01実測図 (1/60)



Ph. 16 SB01実測図 (北西から)

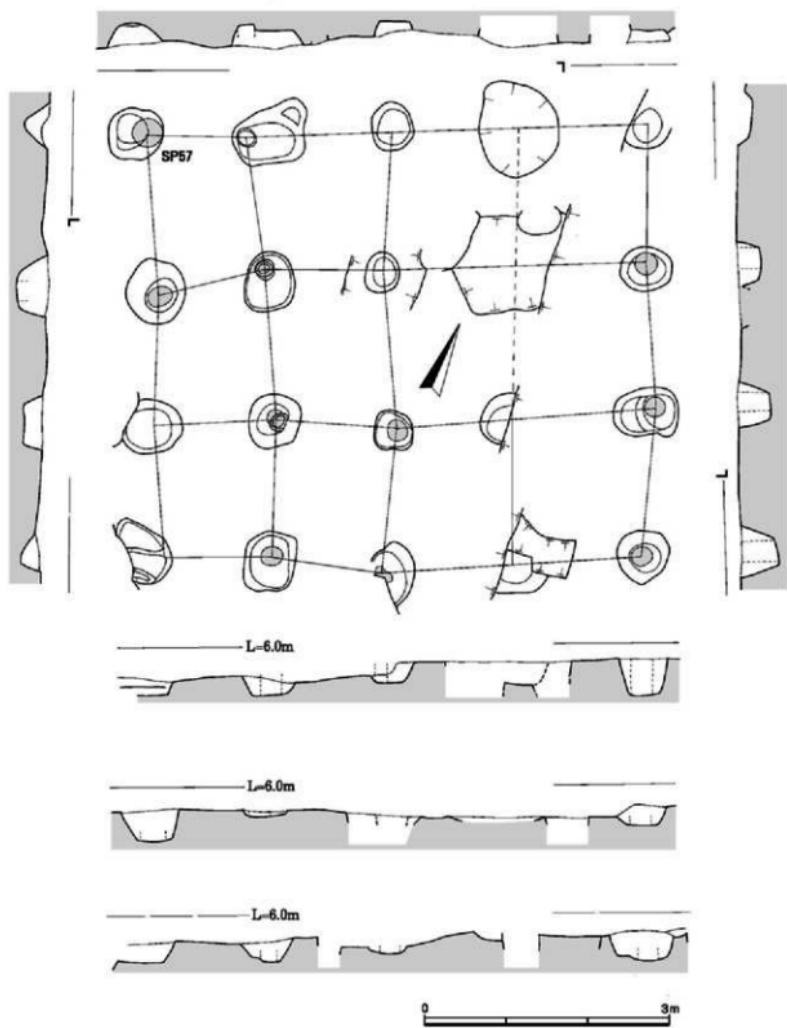
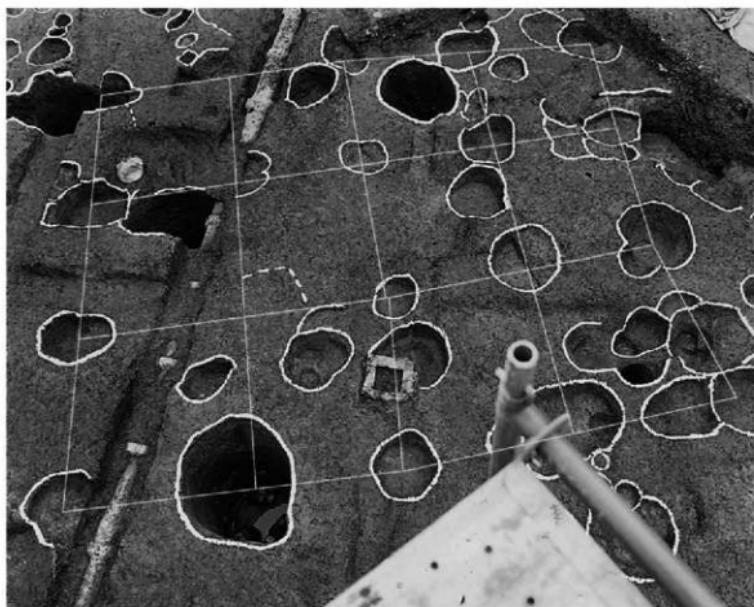


Fig. 23 SB02実測図 (1/60)



Ph. 17 SB02完掘（北から）

明。褐色を呈し胎土は砂粒をほとんど含まず精緻。47は滑石製白玉。48は木質が遺存した鉄鎌茎である。

#### SB03

調査区北際で検出された。方位をN-30° - Eにとった3間の柱列が検出されたが、西側への規模は調査区外となり不明である。柱穴掘方は辺長60~100cmの略方形プランを呈し、埋土内に径30cmの柱痕跡が検出された。柱間は240~250cmを測り、全長740cmを測る。西側へ延びる1間の柱間は210cmと短いことから梁行になる可能性がある。掘方の深さは約10cmと浅く、相当削平を受けている。柱痕は下底より沈下したものも見受けられる。出土遺物は小片で分量も少なく、時期を決められるものは無い。

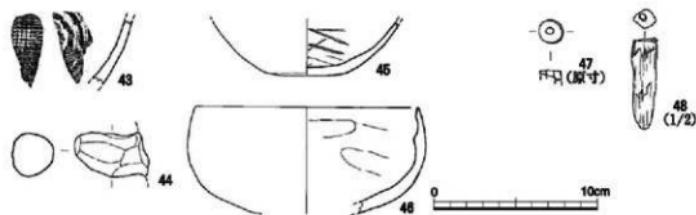


Fig. 24 SB02柱穴出土遺物実測図 (1/1, 1/2, 1/3)

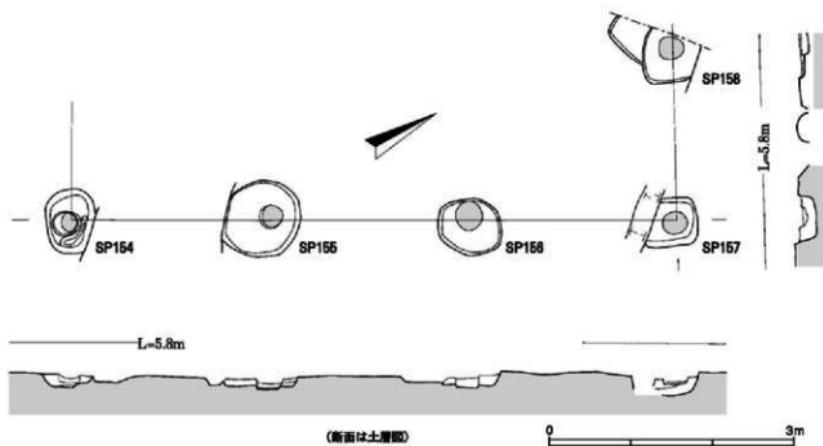
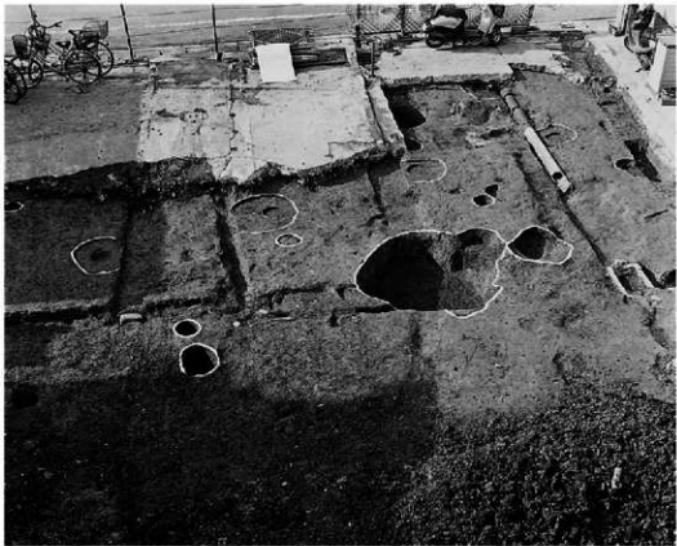


Fig. 25 SB03実測図 (1/60)



Ph. 18 SB03完掘（南東から）



Ph. 19 SP155 (SB03) 検出



Ph. 20 SP156 (SB03) 検出



Ph. 21 SP162 (SB03) 検出

## IV おわりに

### 遺構の時期と性格

出土遺物からみた時期は弥生中期末～後期初頭、弥生終末～古墳前期（布留併行期）、古墳後期～古代に大きく分かれる。

検出された井戸は時期不明のもの 1基と弥生中期末～弥生終末のものが 6 基検出された。いずれも下底は鳥栖ロームの下部までしか達せず、この深さで湧水があったのか、もしくは溜井的なものか不明である。

弥生中期末の遺物や遺構は最も多く見受けられ、1つのピークを示している。SK01、02はこの弥生中期末の祭祀行為の可能性があり、廃絶した建物跡の柱穴に破損した土器を埋置させている。

古代の大型建物跡SB02とSB03はその構造や規模、主軸方位の差異が大きく時期的に異なる可能性が大きい。すなわち柱穴が大きく方形プランが比較的明瞭なSB03が「那津官家」関連施設の可能性が大きく、柱穴が小さく、柱筋も乱れているSB02は後出と思われる。その場合SB03の主軸方位が第 8 次、72 次調査地点の大型倉庫群と異なることは II 章で記したように地形的な制約によるものが大きいと考えられる。なお、SB03は柱間が広く柱痕も 30cm あることから、大型で相応の建物と思われる。

報告書抄録

# 比恵 44

—比恵遺跡群第97次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第900集

2006年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
印刷 松古堂印刷株式会社  
福岡県福岡市西区周船寺1-7-64  
TEL 092-806-1661